『涌蓮大徳短冊帖　完』

涌蓮の短冊は世に稀なるもの也。かく所持は珍なり。

　　春秋の心つくせし言のはにさがのゝ昔し思こそやれ　　　了伴

題書尓然

晩霞　　のどけしな麓のさとはくれそめて峯に入日の影ぞかすめる　　　　　　涌蓮

春月　　明やすき空さへあるを出るよりかすみぞこもる春のよの月　　　　　　涌蓮

名所春月　もしほやく煙におもへなには人かすみは月のくまとやはなる　　　　涌蓮

題書尓然

苗代　　山もとは谷の小川やさきわけしなは代水に花ぞながるゝ　　　　　　　涌蓮

題書尓然

初郭公　ほとゝぎすよそにはしらぬ初声やまつ夜ふけぬる枕にぞきく　　　　　涌蓮

郭公遍　たがさともきゝやふるさむほとゝぎすいまは五月の明暮の声　　　　　涌蓮

題書尓然

廬橘　　たちよりてむかしをとへばたちばなの花のしづくに袖ぞぬれける　　　涌蓮

題書尓然

閏月七夕　天の川おなじふ月の名なりせばこよひもわたせかさゝぎのはし　　　涌蓮

題書尓然

原虫　　草のはの夕はわきてをく露のかずにもあまる虫の声〳〵　　　　　　　涌蓮

鹿声夜友　山ざとにつまとふ鹿のこゑなくばあきのね覚やさびしからまし　　　涌蓮

題書尓然

秋夕　　人なみに哀とばかりいひなしてこゝろなき身の秋の夕暮　　　　　　　涌蓮

題書尓然

高山待月　こと峯はふもとの雲に埋もれてはれたる富士をいづる月影　　　　　涌蓮

擣衣　　露しもと共におきゐて賤の女のよをなが月と衣うつらむ　　　　　　　涌蓮

題書尓然

初冬　　いとはやもしぐれて寒き山ざとはきのふの秋の色ものこらぬ　　　　　涌蓮

題書尓然

寒草　　更にまたさびしくもあるか冬がれのおばなが袖にのこる秋かぜ　　　　涌蓮

題書尓然

千鳥　　今もなを同じなぎさの友ちどりむかしのあとをしたひてやなく　　　　涌蓮

庭雪　　つもるゆきみしよの木だちそのまゝにあとをうづまぬ山陰のには　　　涌蓮

題書尓然

深雪　　ふみわけてともにとはれし雪もけさみちたゆるまでつもる山里　　　　涌蓮

題書不知

河雪　　まつかぜはふりつむ雪にしづまりてひとりをとずる滝つ川なみ　　　　涌蓮

題書尓然

初尋縁恋　たづねばや浪にうかるゝかたし貝そなたによする風のしるべを　　　涌蓮

待恋　　待になを人はとひこで槇の戸にかたぶく月の夜こそ更ぬれ　　　　　　涌蓮

題書潭空

片恋　　かずならぬ我身ひとつをかこてとやおもふを人の思はざるらむ　　　　涌蓮

題書尓然

忘恋　　神かけてちかひしこともある物をなにとて人はわすれはてける　　　　涌蓮

題書尓然

忘住所恋　なをざりにをしへし人のこゝろかとおもふまどひに宿はわすれつ　　涌蓮

題書潭空

絶恋　　等閑の夜がれになして恨みけりはやくも人はおもひたえしを　　　　　涌蓮

〈題ナシ〉　人ははやおもひたえしを等閑のよがれになしてなにうらみけむ　　涌蓮

題書潭空

寄橋恋　かけてしもかひやなからむあづまぢの緒だえの橋を中にたのまん　　　涌蓮

題書潭空

寄杣木恋　恋すてふ色には出じ杣木ひくまさきのつなのくるしけれども　　　　涌蓮

山中滝水　うきてたつ雲をなかばのとだえにて千尋をおつる山の滝つせ　　　　涌蓮

題書潭空

波洗石苔　ぬれてほすひまこそなけれ浪あらふいそべの岩の苔のころもは　　　涌蓮

題書尓然

述懐　　のがれこしはじめと人もいとはれしいまは友こそあらまほしけれ　　　涌蓮

独述懐　やま住に心をしれる友もがなをこたるみちをさとしあはさむ　　　　　涌蓮

題書潭空

釈教　　くるしみの海にいつまでたゞよはむかゝるみのりに生れあはずは　　　涌蓮

釈教　　しばしこそ外にもとむれのりのみち終に心のうちにさとらむ　　　　　涌蓮

　　　　　玄無法師住ふりし嵐の庵室に

　　　　　宝暦十の年、四月廿六日

　　　　　弥陀尊を入仏せられしとて、予を

　　　　　まねかれけるに、供養をはりてのち

　　　　　人々にすゝめられて

　　　　さはりなき光をみれば此いほにその世の人も在明の月　　　　　　　　達空

題書潭空

秋泊瀬山　常よりもあはれやそふるはつせやまあきたつけふの入相のかね　　　涌蓮

題書潭空

手向山　梢ふく風のまに〳〵手向やまさくらはぬさとちらぬ日もなし　　　　　涌蓮

題書潭空

筑波山　つくばやまつきぬなげきのしげゝればそでにぞ恋のふちはなしつる　　涌蓮

題書潭空

春田籠浦　おきつ風吹こす程や多枯の浦の磯辺のまつにさはぐ藤なみ　　　　　 涌蓮

題書潭空

大淀浦　あ引する声ばかりして大よどの浦半のまつも見えずかすめる　　　　　 涌蓮

題書潭空

高師浜　逢ことはかけてもしらぬ中なるにたつや高師のはまのあだなみ　　　　 涌蓮

題書潭空

玉川里　玉川のさとのきぬたに目をさましたびねのまくら浪ぞかけゝる　　　　 涌蓮

題書潭空

葦屋里　ひまもなくかすみにけりな八重ぶきの芦屋の里の春のあけぼの　　　　 涌蓮

題書潭空

作良科里　須磨あかしいづこはあれど秋の月ゆきてを見ばや更級のさと　　　　 涌蓮

題書潭空

視　　　みるといふみるは見るかはいろ〳〵の色をはなれてあらばこそあらめ　涌蓮

題書潭空

聴　　　聞ことのひとつ風なるひゞきをばきよ（くの誤？）にこゝろのなどうつる蘭　　　　　涌蓮

題書尓然

多　　　あみだ仏といひていたらぬ道なくば塵沙無明をいかではらさむ　　　　　涌蓮

題書尓然

少　　　なにはえやをく霜ふかくなるまゝにかれたつあしの色ぞすくなき　　　　涌蓮

題書潭空

少　　　極楽をねがふすがたになりぬれどおもふ時こそすくなかりけれ　　　　　涌蓮

題書尓然

遅　　　めぐみたつ梢のつぼみけふあすとまたれてをそき庭の初はな　　　　　　涌蓮

予が家の先、尓然・潭空のふたり世をのがれて嵯峨の山奥に

庵しめけるに、涌蓮大徳とは二なき友なりければ、さる故もて大

とこの短冊多く家に伝へもたりけるを、人のすゝむるによりて水

茎のあと聊もたがへず梓にものすとて

　　またゝぐひあらしの山のさくら花後の世までも猶にほふらむ

　　　　　　　　　　　　　　　　川喜田政明　石水（印）

　　　　　　　　　　　　　　　　東都　　岡田屋嘉七

　梅廼屋蔵板　　書　　　　　　　伊勢津　沢田左兵衛

　　　　　　　　　　　　　　　　皇都　　戎屋市右ヱ門

　　　　　　　　林　　　　　　　大坂　　藤屋禹三郎

　　　　　　　　　　　　　　　　同　　　藤屋善七